

執筆者紹介

ひろせ ひろこ
広瀬 裕子 本学文学部教授

ふくしま よしかず
福島 義和 本学文学部教授

〈編集後記〉

『月報』No. 657号には、2本の論稿が収められている。

広瀬裕子所員による「ラディカルな教育再生を軸にした地域再生—ロンドン・オリンピックのホスト地ハックニー区の改革—」は、ロンドン・ハックニー区において1990年代以降に展開した地域再生、とりわけそれを先導した教育改革を対象とする論稿である。ロンドンのシティに隣接するハックニー区は、2012年に開催されたロンドン・オリンピックのメイン会場となった地域だが、現在においても貧困度が高い。とりわけ1990年代以前には、土壤汚染が激しく産業が斜陽化していただけではなく、移民が多く治安の面での悪評も高かった。それらに加え政治的な混乱もあり、1990年代後半には、カウンスルによる行政サービスが機能しないほど、行政機能が破綻していたという。そうしたハックニー区において、特に深刻な問題として認識されていたのが教育であった。ハックニー区の子供たちの学業は「最低水準」にあり、学校での授業は成立せず、教員によるストも長期化していたとされる。本稿では、数多くの報告書、新聞等の分析を通して、中央政府による地方行政の権限剥奪および私的セクターによる行政サービスの「包括的奪取」という「前代未聞でラディカルな」手法で進められた、ハックニー区の教育改革の内実、展開過程が詳細に描かれる。そのうえで筆者は、改革の「成功」の要因を明らかにするのみならず、同区の事例から「有事のガバナンス改革の手法として汎用的に一般化しうる知見」を抽出している。ふんだんに盛り込まれた改革の「成功」後のハックニー区の美しい写真は、本稿の内容およびその主張を裏付けるものとなっているといえるだろう。

福島義和所員による「石巻市中心市街地における復旧・復興経過から学べること」は、東日本大震災で大きな被害を受けた石巻市を対象に、復旧・復興のための戦略および政策について考察している。本稿では、まず1985年のメキシコ地震と2005年のハリケーン・カトリーナについて言及される。災害後の再建の過程において、前者では国家（政府）が、後者では地域および市民が重要な役割を果たした。こうした事例にもとづき、本稿では、都市（石巻市）の（再）開発に対する、国家および地域のかかわり方が検討されている。筆者は、実際に石巻市に赴き、都市・街の現状を肌で感じ、さらにはそこで暮らす人々との対話を通じて、同市の復旧・復興過程におけるさまざまな問題をあぶり出す。本稿は、石巻市の（震災前の工業の振興政策を含む）歴史と現状をふまえ、効率性や生産性のみを優先する地域構築に対して、あらためて警鐘を鳴らしていると思われるのである。

さまざまな出来事がありました2017年度も、いよいよ最後の月となりました。お忙しい年度末をお過ごしかと思います。本『月報』は、来年度の始まりの月、すなわち来月にも発行される予定です。みなさまからのご投稿を、こころよりお待ちしております。よろしく申し上げます。

(M)

2018年3月20日発行

〒214-8580

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1番1号 電話 (044)911-1089

専修大学社会科学研究所

The Institute for Social Science, Senshu University, Tokyo/Kawasaki, Japan

(発行者) 宮 寄 晃 臣

製作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前2-10-2 電話 (03)3404-2561
